

帚種類

〔和爾雅五〕帚ハ、キ 帚ハ、キ

條帚ワラハ、キ

掃帚タケハ、キ

幣帚ニハ、キ 書序指南云、除地之帚曰幣帚、

獨帚ハ、キ

棕帚シニロハ、キ

笮帚サ、ラ

炊帚カマハ、キ

芒帚キハ、キ

〔和漢三才圖會〕帚ハ、キ 帚ハ、キ

帚ハ、キ

帚ハ、キ

帚ハ、キ

帚ハ、キ

和名波波木

按帚有數品。羽帚可以掃茶具漆器。棕櫚皮帚可以掃筵席。棕櫚葉、莎草及稗心帚。其下品者也。竹枝、黍地、膚草可以掃庭砌。

〔本朝世事談綺器用〕帚

掃帚と云草より起る。此草莖の玄なやかなるものなり。乾し葉をさりて塵を除るに用ひそめたり。よつて塵芥を除るものを、すべて帚と云也。本草云、子落則老、莖似藜、可爲帚。櫻櫚帚、竹帚、藁帚、羽帚など數品あり。又玉帚あり、玉は賛たることば也。無名抄に物をほむる詞と見て、くるしかるべきにやとあり。

〔和漢文操傳〕帚傳

井重平

天地いまだひらけざる時は、霧のごとく霞に似たるを、天津朝起の神ありて、それを掃よせ給ひぬれば、ひとつの鳥となりけるを、伯耆の國と名づけ給ひ、唐詞には、伯州ともいへる。世界に秀句のはじめなりとぞ、さて白幣、青幣など、社をきよめ、神を涼しむるより、天にか、れば彗星とか、やき、地におふれば、帚木とさかふ、まして人間の用にたつ時は、金殿をひらきて、玉帚の歌によまれ、民間に光をやはらげては、藁帚の塵にまじはる、いと、飾羽の公義むきには、卓の香爐に名をならべて、三羽一羽は、爐手前より、風爐の炭の時節をあた、め、大羽帚は、尻いざりして、茶人の風情をもつくるなるべし、玄かるに、櫻櫚帚といふ物は、山寺の兒そだちにて、髪も櫛の齒のはけ先をそろへ、わらび繩のまきめもかたげなれど、暖簾の奥の娘が手にふれて、あだなる心のつきそめしより、廊下に狂ひ、廣敷にうかれ、馬に乗られつ、鑓にふられつ、所さだめぬ、轉寐に、性惡の名のたちそめて、帚々とはいはれけむ、源氏もは、木々の名のみ残りて、今は紙袋の頭巾もなく、さか